

第9回
△子どもノフィクション文学賞○



2週間マイナス — 1日の一人旅 —

／アメリカ編／

鳥取大学附属中学校 三年
田村 彰悟

— 海外の大学で学びたい —

僕は父の仕事の都合で小学校二年生までの三年間をアメリカで過ごした。また、父を含め身近な人に大学の先生が多かったので、よく大学の話を聞いたり、大学に足を運んだりした。そのため小さい頃からこのことを意識してきました。だが昨年の十一月にハーバード大学を卒業された日本人の方のハーバードでの大学生活についての話を聞き、「アメリカの大学で学びたい。」という思いはより強いものになつた。そして海外の大学での授業の様子や、

寮生活について自分なりに調べてみた。

その日も台所でお茶を一杯飲んだ後いつものように大学について母と短い話を交わしていた。その時母はこう言つたのだ。

「春休みに自分の目で見てこれば？」

と。ネットや本に書いてある情報だけでなく、大学の中で先生や学生さんの話を聞ける頗つても無いチャンス。行きたいと即答した。父も賛成してくれ、それから準備が始まった。

大学を見学するだけでなく、自分がお世話になつた小学校で一～四年生に日本について紹介をさせて欲しいと小学校時代の恩師に頼んだ。彼女は他の先生たちにも話して午後の授業を全て僕のために空けてくれた。二年前にも全校の前で日本についてのプレゼンテーションをした。そのときは短時間だったのでスライドでの紹介にどまつた。今回は小さい子が対象で、しかもたくさんの時間がある。プレゼンではなく、体験することを通して日本文化に触れてほしい。そう思い、今回は折り紙と絵

本の読み聞かせをすることにした。また、日本の食べ物、ドラえもんやアンパンマンといったキャラクターについても知つてもらいたくて、マジックとゲームを混ぜた遊びもすることにした。二月に入つてからは毎日の夕食後の時間を練習に当てた。妹たちが通つている小学校で絵本の読み聞かせボランティアをしている母からアドバイスをしてもらい、また自分が妹たちに絵本の読み聞かせをしているところを録画してもらつてふり返つて、うちに、徐々に上手くなつていっている手応えを感じた。

アメリカの学校の子どもたちへのプレゼントとして、家族で協力して折り紙の独楽や折り鶴、ピカチュウも作つた。その数なんと各一五〇個。実際に千枚近くの折り紙を折つたのだ。これらをスーツケースに入れ、服や日用品などの荷造りも済ませ、床についた。ワクワクしていくとすぐに寝ることはできなかつたが、いつの間にか部屋が視界から遠のいていって眠りについていた。

目が覚めたとき、外はまだ暗かつた。朝食のおにぎりを食べて、身支度を済ませ、パンパンのスーツケース(中

身は折り紙の作品)を手に車に乗り込んだ。空を見上げると暗やみの中に月が浮かんでいた。帰国する頃にはこの月が逆向きになつているのだな、と風雅なことを考えていた。

鳥取砂丘コナン空港に着き、荷物を預けるためにカウンターに並んだ。そこで荷物の受け取りについての説明を受けた。シカゴとデトロイトでスーツケースをピックアップするようなど言われ、いよいよ出発だな、と思つた。

家族も東京で予定があつたので、羽田までは母と妹たちと一緒に行つた。飛行機の中では母と最終確認をしたり、一番下の妹と遊んだりして過ごした。羽田で父と合流し、国際線のターミナルへ向かつた。高いエスカレーターの先にはこれから日本を出国する人の大行列ができていた。

自分もその列に並び、出国審査を終えて搭乗ゲートへ向かつた。搭乗まで二時間くらいあつたので、空港内を歩いたり、本屋で立ち読みしたりして時間を過ごした。

第9回
△子どもノンフィクション文学賞〇

ゲートの前に列ができ始めたのが見えたので、散歩から引き返してゲートへ向かった。

「搭乗を開始してください。」

というアナウンスで列が進み出した。さあ、これから一人でアメリカに向かうんだ、という少しの不安と、大きな期待を胸に、僕はシカゴ行きの飛行機に乗り込んだ。

空の旅は予想以上に楽しかった。ANAのおいしい機内食や、最新の映画を見たことももちろん乐しかったが、何より楽しかったのは横に座っていた方からとても興味深い話を聞けたことだ。着陸まであと一時間というところで入国審査のための書類への書き込みを始めた。そこで少しおかしいことがあったので横の方に尋ねたところ、ちらつと見えたのか、

「何しにミシガンに行くの？」

ときかれた。僕は、アメリカの大学で学びたいこと、そのため名門のミシガン大学の教授や学生さんと話をして、実際に自分の目で見に行くのだ、ということを話した。彼は口サンゼルスの私立大学の大学院に通っている

と教えてくれた。毎回の授業では討論があり、そのため分厚い論文集を読み込んで授業に臨むのだという。常に自分の意見を持ち、それを発信すること、自分の発言に説得力を持たせることが求められているという。彼は政府の奨学金制度についても教えてくれた。海外の大学は学費がとても高く、奨学金なしでは通えない。高い目標を持つた若手の国家公務員のために国が海外大学院で学ぶための学費、生活費をサポートしてくれるらしい。特に彼が働いている経済産業省では国連や世界各地の企業でのインターンを経験したことで見えた日本の課題を解決したいと思い、海外留学を希望する人が多いらしい。彼の話を聞き、今僕にできることは何だろうと考えてみた。今すぐ留学できるわけではない。だが、日々の学習や部活に目的を持つて取り組むこと、生徒会のリーダーとして全校の前に立ち話をすることならできる。こうしたことの積み重ねで今世界に求められており、またアメリカの大学でも重要なスキルである自分の考えを発信する力を育むことができるのではないかと思

つた。彼の話に吸い込まれ、気付いたらシカゴ空港に降りていた。不思議なことに、いつも苦しめられている耳の痛みは全く感じなかつた。

シカゴ空港で入国審査を経て、二年ぶりにアメリカに戻ってきた。それから空港内を走る電車に乗り、ターミナル5（国際線）からターミナル1（国内線）へ向かつた。途中で大きなホテルが見えた。二週間後に自分がそこで一泊することになるとはこのとき夢にも思わなかつた。今度はターミナル1で搭乗手続きを済ませてゲートに向かつたのだが、とにかく遠い。さすがは世界一忙しい空港だけあるなと思つた。シカゴ空港でデトロイト行きの飛行機を待つていた時間はとても長く感じられた。

いや、実際長かつた。離陸予定時刻を三〇分過ぎても搭乗が始まらない。何かあつたのかなど不安になつてきた。やつとのことで飛行機に搭乗をしたのだが離陸したのは予定時刻の一時間後、やっぱりおかしいと思いながらも、

日本からの長旅の疲れで、そんなことはいつの間にか忘れて僕は爆睡していた。目が覚めると外には雪原が。デ

トロイトだ。しかも到着予定時刻ピッタリ。実はデトロイトとシカゴでは一時間の時差があり、そのことを知らない僕はただ一人勝手にイライラしてたのである。

デトロイトに着いたときはいよいよロジャーとノーマに会えることへの興奮でシカゴでのことなど完全に忘れており、一時間の時差に気付いたのはこれまた二週間後のことであつた。

ここから僕のミシガンでの二週間が始まつた。毎日が刺激的で最高に楽しかつた。この二週間で僕が経験したこと、感じたことを順に記していこうと思う。

—三月十六日（木曜日）—

ついにミシガンに着いた。国内線で来たので何も手続きはなく、やけにスマーズだなくなどと思いながらスーツケースを受け取りに行つた。スーツケースを探していると、突然

「ショウゴ？」

と声をかけられた。ロジャーさんとノーマさんがデトロイトで待つていてくれたのだ。久しぶりに会えたうれし

▷子どもノンフィクション文学賞 ◇

さ、僕を待つてくれたことへの感謝の気持ちでいっぱいになつた。

スースケースを車にのせて、アナーバーにあるロジヤーさんとノーマさんの家に向かつた。到着すると部屋に案内してくれて、また、シャワーの使い方なども教えてくれた。そこで次の日に行くセント・ポール（僕が以前通っていた小学校）での授業の準備をし、ロジヤーさんとノーマさんと話をしに一階へ降りた。夕食はノーマさんが作ってくれたタイカレーだった。すごくおいしくて、何杯もおかわりをした。食事中は日本からの空の旅の話に加えて、数学の先生であるロジヤーさんと極限についての話をした。

「^{lim}_{n→∞} 1/n でも 1/n が 0 になることは決してないんだよね。」

というロジヤーさんの話を聞いてなるほどと納得した。

食事後にロジヤーさんから

「アイスクリームは好きか？」

ときかれた。もちろんだと答えると、

「じゃあアイスクリームを食べに行こう。」

とノーマさんが言い、車に乗つてダウンタウンアナバーにあるアイスクリーム屋さんに向かつた。アメリカでは皆何かごとにアイスクリーム屋さんに家族や友

だちと足を運ぶのだが、日本ではあまり馴染みのないアイスクリーム屋さんへ行く機会に僕は胸を躍らせていた。アイスクリーム屋さんではロジヤーさん一押しのミシガンブラックベアを注文した。これはチヨコとラズベリーとアイスクリームをミックスしたもの。キッズサイズを頼んだ。驚くかもしれないが、アメリカにおけるキッズサイズは日本の「大」を優に超えている。ロジヤーさんはダブルがいいぞと何度も言つていたが、僕にどう

てダブルはあまりにも多すぎた。テレビを見ると画面にはバスケットボールの試合が映されていた。その時期はちょうどバスケットボールの学生選手権大会が開かれており、どこの店に行つてもテレビはバスケットボール一色だった。日本でもこういったものはあるのかときかれ、僕は日本の部活について話した。アメリカではお金をは

らつてクラブに参加するのが一般的なので、彼らは僕の話に興味をもつてくれた。アイスクリームを食べてほつと一息つくと、今度は疲れがどつと出てきて、帰り道は失礼ながらも寝てしまつた。家に着くとすぐにシャワーを浴びてベッドに入った。前夜と違い、すぐに眠ることができた。

—三月十七日（金曜日）—

バインダーの隙間から朝日が差し込んでいるのが見えた。僕にとつてアメリカで迎える最初の朝。ミシガン大学の見学やセント・ポールでの授業などで盛りだくさんな一日が始まつた。

朝食を食べて、ロジャーさんとミシガン大学へ行つた。大学では微積分の講義を受けることになつていた。退官されたミシガン大学の教授であるロジャーさんが僕のためにアポイントメントを取つてくれたのだ。教授や学生さんの話を聞くのに加えて、講義に参加させてもらえるのだ。高鳴る胸をおさえながら、僕は講義室に足を踏み入れた。微積分のクラスは二十名前後の少人数クラスだ

った。四、五人で一つのテーブルを囲み、テキストの最後の方にある演習問題を解く。ただ解くだけではなく、なぜその場面でこの公式を使えるのか、その公式はどのようにして証明できるのかといった根本的なことについてもグループごとに討論する。教授が各グループをまわり、一人一人に質問をして微積分の根本的なところを理解できているか確かめるそうだ。学生さんは、

「毎回口頭試験の繰り返しだが、世界中から集まるクラスメイトと討論することはすごく刺激になる。君もここで学んでみないか。」

と言つてくれた。僕も彼らのように自分に自信を持ち、日々世界中から集まるクラスメートとの議論を通して互いに刺激し合いながら学びたい、ミシガン大学で学びたい、と強く思った。

その後ロジャーさんにキャンパス内を案内してもらつた。十九世紀前半に建てられたミシガン大で最も古い建物の塀の上を走るリストと、うつすら積もつた雪の上に小さな足跡を残しながら歩いていたロビン（鳥）の姿が脳

◀子どもノンフィクション文学賞 ◎

裏に浮かんでくる。

キャンバス内をまわって、次に向かつた先はセント・ポール。まず先生たちにあいさつし、ルイス先生と昼食を食べるためにカフェテリアへ行つた。その日の昼食はチキンパティ。確かセント・ポールに初めて来た日のランチだつた気が…。すごくなつかしくて、おいしい味だつた。

昼食後すぐに幼稚園に行つた。三月十七日は聖パトリックの日なので園児も、先生も皆緑色の服を着ていた。

先生が

「日本から来てくれたスペシャルゲストのショウゴだよ！」
と紹介するとみんな

「ワーッ！日本からだつて！日本からだつて！すごい！」

と大騒ぎ。どうやらこのクラスには日本人の女の子がいたらしい。三十分ほどしかなかつたので、早速紙芝居から始めることにした。今回はリスについてのお話。僕が

「みんなは学校へ来る途中にリスを見たことある？」

ときくと皆口々に登校中に見ただとか昨日公園で見ただとか言っていた。ミシガンでは至る所にリスがいるのだ。

次に

「じゃあ、この中でリスが何を食べるか知っている人は手を挙げて。」

と言うと、全員の手が挙がり、順に当てていくことにした。園児の答えはナツツビピーナツツの繰り返し…。お話を中ではリスはどんぐりを食べることになつていたので、僕が

「みんな大正解！リスはナツツを食べるよね。このお話の中のリスもナツツが好きなんだ。ナツツの中でも特にどんぐりがね。」

と言うとまたまたみんなの手が勢いよく挙がつた。どんぐりは食べられるのか、どれくらいの大きさのどんぐりなのか、と園児の質問攻めを食らつた。そこで先生が

「質問や意見があつたら最後にしようね。」

と助け船を出してくれた。練習の成果もあつて、スムー

ズに、時々園児の注意を引くようなアドリブも混ぜながらも紙芝居を読み終えることができた。子どもたちに質問はあるか尋ねると皆手を挙げた。でも今回は質問ではなくて、多くが紙芝居の感想だった。

「リスさんはがんばり屋さんだね。」

「とてもおもしろかったよ。」

といった子どもたちの一言一言に心が温まつた。子どもたちに喜んでもらえて良かった、と心の底から思った。

紙芝居を読み終えた後、少し時間が残っていたので、みんなでゲームをした。例のマジックの要素も混ざったやつだ。僕が目を閉じている間に、一人の子にあらかじめ作つておいた日本の食べ物やアニメキャラクターの一覧の中から好きな物を選んでもらう。その後一覧の上に、何個か穴を開けた型紙をかぶせ、その中に選んだ物があるか尋ねる。穴の場所をかえた型紙を四枚用意し、先程の質問の答えがイエスなら表、ノーなら裏にして四枚を重ね合わせ、一覧の上にかざすと、残った一つの穴の中にある物がその子が選んだ物。こういったいわば数学的

なトリックを用いたゲームだが、一回やることに幼稚園児は皆歓声を上げてくれた。幼稚園の後に行つた小学校でも同じゲームをしたのだが、そこでもみんな楽しんでくれた。

最後の五分はみんなでじゃんけん大会をすることにした。しかも日本語で。でも僕は決定的なことを見落としていた。四歳の子はまだじゃんけんができないのだ。ゲームがチヨキに勝ち、チヨキがバーに勝ち、バーがグーに勝つ。この理屈をまだ理解できていなかつた。それでもみんなで「じゃんけんぽん！」

と言うのを楽しんでいた。帰り際に折り紙の独楽をプレゼントすると、子どもたちは「お兄ちゃんお姉ちゃんに見せてあげるんだ。ありがとう。」

と言つた。この後小学生にも独楽や鶴をプレゼントする予定だから家に帰つてお兄ちゃんお姉ちゃんも同じものを持つていると知つたらこの子たちはいつたいどんな顔

▷子どもノフィクション文学賞 ◇

をするのだろう？そんなことを思いながら僕は幼稚園教室をあとにした。

「この中で、どれが日本について本当のことだと思う？」

という先生の声が二年教室から聞こえてきた。忍者や侍という声が外まで響く。どうやら日本の歴史について学んでいるようだ。僕はその場で大きく深呼吸し、一、二年生の子たちが待つ教室に入った。ホワイトボードには大きな日本地図がはらっていた。こんなにもみんなが日本について知りたいと思ってくれているとわかり、胸が熱くなつた。自分も日本についてしつかり伝えなくては、という気になつた。

早速僕の二年生時の担任のW^{ダフリュー}先生が

「みんな、日本から来てくれたショウゴだよ。七年前にこの教室で学んでいたみんなの先輩だよ。」

と紹介してくれた。「先輩」と紹介されて少し照れくさかつた。持ってきた手提げ袋の中から巨大ピカチュウを出してホワイトボードにマグネットではると、教室中が

ざわついた。ピカチュウだ、大きいなあ、といったつぶやきが耳に入った。僕が

「少しこくなるけど、今日はみんなで折り紙のピカチュウを折つてみよう！」

と言うと皆口々に「イエス！」（日本語では「よし！」）と言つていた。まず僕が巨大折り紙を折つて、その後各グループをまわつて教えたり、手伝つたりする、というスタイルをとることにした。折り紙を折るのが上手な先生たちが、僕をサポートしてくれた。多くの子にとつて折り紙を折るのは初めてのことだつたらしく、端をそろえて半分に折る、という作業に苦戦していた。あつという間に折り紙のための三十分は終わつてしまつた。まだ作業の半分も終わつていない、どうしよう、と慌てていたところ、W先生とシユナック先生の二人に、「折り紙のことは先生たちに任せて、ショウゴは三、四年生教室に行つてきなさい。安心して。」と背中を押された。

「ピカチュウの折り方はこのプリントに書いてあります

す。ありがとうございます。」

と言つて、僕は一～四年生のみんなに絵本を読んだり、一緒にゲームをしたりしに三年生教室へ向かつた。初めに日本の絵本の読み聞かせをした。雲から落ちてきてしまつたかみなり様の息子であるかみなりちゃんと、「自分は男なんだ。」と子どものくせに変なプライドを持つただるまちゃんの交流を描いた心温まる話である「だるまちゃんとかみなりちゃん」を読んだ。ピチャツ、ピチヤツという雨の音や、雲の上にあるかみなり様の世界のところがおもしろかつたらしく、そこで少しツッコミを入れるとみんな笑ってくれた。アメリカの子はよく笑う。

ちよつとしたことでも笑つて、それにつられて僕も笑顔になつた。スマイルは大切な、これからも大切にしたいな、と思つた。

その後幼稚園でしたゲームで遊んで、ルイス先生がぜひ、と言うからリコーダーで「ふるさと」を吹いて、最後に持つてきた写真を使って鳥取の自然についての紹介をした。ミシガンには砂丘もあり、五大湖もある。冬は

寒いし…。鳥取に少し似ているところがある。一通り紹介を終えて質問はあるか尋ねると、一人の子が手を挙げた。一年生か二年生の子だった。その子は

「毎朝何時に学校に行くの？」

と僕に聞いてきた。その子が座るとその後先生が止めるまで何時に寝るのか、好きな食べ物やスポーツは何か、といった僕についての質問を立て続けに受けた。質問者は皆一、二年生。やはり…。一方で、三、四年生は

「日本では祝うけどアメリカでは祝わない祝日とか、逆にアメリカでは祝うけど日本では祝わない祝日つてありますか。」

といつたすごく鋭い質問をしてきた。

「日本ではクリスマスに学校があることもあるんだよ。」とまずはクリスマスについて、続いて節分などの旧暦に基づく祝日についての話をすると皆すごく驚いていた。両国の文化や価値観の違い、そして共通点。こうして話をしているうちに時間はあつという間に過ぎ、子どもたちの下校時間が迫つてきた。最後の質問に答え、子ども

第9回
△子どもノンフィクション文学賞 ◇

たちに折り紙の独楽と鶴をプレゼントした。一、二年生はW先生とシュナック先生が折つてくださったピカチュウもある。二人の先生のご協力、そして僕にこんなすばらしい機会と時間を与えてくれたルイス先生にはすごく感謝している。お礼を言つて、少し話をして、僕はゼント・ポールを後にした。また来る、と心に誓つて。

ノーマさんが迎えに来てくれて、帰りの車の中ではゼント・ポールでの授業の話をした。また、ルイス先生が土曜日にアナーバーを案内して貰えるとおっしゃついたので、そのことも話すと、ノーマさんはぜひ行つてきなさいと言つてくれた。家に着き、すぐルイス先生ご夫妻に「明日よろしくお願ひします。」というメールを送つた。そして一階に降りて、ロジャーサンとノーマさんの娘さんご夫妻とのディナーのためにレストランへ向かつた。

ガリツ。駐車場は凍つていて、一步進むたびにガリツと足元が鳴つた。すごく寒くて、レストランに入ると暖房で眼鏡がくもつた。ロジャーさんとノーマさんの娘さ

んご夫妻は、僕らがメニューを見ているときにはレストランへ来た。はじめまして、とあいさつをして、お互に自己紹介をした。それから僕はハンバーガーを注文した。メニューはタブレット端末に載つていた。全てがワントッチで済んでしまう。レストランに限らず、アナーバーは僕がいない六年の間に大きく変わつていた。ハンバーガーをナイフとフォークで食べながら、僕は今朝の講義をふまえて大学について、気になつたことやその先の進路についての質問をした。ご夫妻は、

「大学院は奨学金の数が増える分自由に選択できる。それに私たちのように、自分がしたいことをするために入学後に大学を変えるというのもありだよ。そのためには自分が本当にしたいことは何かとことん考え、突きつめる必要がある。」

とおっしゃつた。二人の言葉を聞き、自分は「アメリカで」というところにばかり目が行つていて、何をしにアメリカへ行くのか、なぜアメリカでなければならぬのか考えていなかつたことに気付かされた。中・高の残り

の四年間で様々な価値観に触れ、自分と向き合い、夢を実現するための方法としてアメリカの大学への進学を選ぶべきだと思った。非常に濃い二時間過ごすことができた。お忙しい中来てくださったことにすごく感謝している。

外はすっかり間に包まれていた。何だか目がパツチリ開いていて、眠さを感じなかつたので、忘れないよう日に記を書いて、（大学ノート四ページ）ベッドに入つた。ベッドに入つたらすつと眠りについた。興奮してて眠さを感じなかつたのだろうが、体は疲れていたようだ。

—三月十八日（土曜日）—

目が覚めて、時計を見るとまだ五時だつた。ロジャーさんとノーマさんは七時頃に起きるので、それまでロジャーさんに頂いた微積分の教科書を読むこととした。読み出すと止まらなくて、あつという間に七時になり、着替えて一階へ降りた。朝食はルイス先生ご夫妻と食べるこになつていたので、先生が迎えに来てくれる九時に

なるまで三人で話をした。

ピンボーンと玄関のチャイムが鳴つた。僕はコートを着て外に出て、先生の車に乗り込んだ。ルイス先生の旦那さんは六年ぶりに会つた。先生が

「今日はランシングに行こう。ショウゴは帰国したから四年生の遠足に行つてないんだよね。」

と言つて、僕たちはミシガン州の州都ランシングへ向かつた。僕は道中ミスター・ルイスとたくさん話をした。彼は言語学習にすごく興味を持つていた。自分の第二言語の学習方法を教えてくれたり、僕にどうやつて英語を学んだのか聞いたり。そうしているうちにランシングに着いた。また、僕はランシングに行く途中「人生初のマック」を経験した。マクドナルドで朝食を食べたのは生まれて初めてだつた。このことを話すと、二人は目を丸くして、「うそだろ。」と言つた。それぐらいマックはアメリカ人の食生活には欠かせないものなのだろうか…。少なくとも二人はハンバーガーとチップスなしでは生きていけないと言つていた。

第9回
△子どもノフィクション文学賞○

ランシングでは州議事堂を見学したり、州立博物館を先生に案内してもらつたりした。気がついたらもう帰る時間になつていた。たくさん話して、たくさん笑つて。そんな楽しい時間を帰りの車の中で過ごした。次の日にルイス先生から博物館で撮つたちよつとクレージーな写真がメールで送られてきた。普段思わずふいてしまつた。自分の写真だというのに…。

帰つてきて少しつた四時頃にハーヴィーさんとジョーさん、そしてジョー・ルデマさんが家に来た。夕食までしばらく時間があつたので、メールで伝えたようにみんなで折り紙の独楽を折つた。みなさんとても上手だつた。折りながら自分や妹たちの学校生活、最近はまつてること、そしてアメリカでの二日間の間の出来事について話した。僕は小学生のとき、毎日学校帰りに彼らの家に行つてその日あつた出来事を話していた。また、毎日のように老人ホームに住んでいたロイスさんのところに行つて話したり、一緒に博物館や植物園に行つたりしていた。ロイスさんは一年前に亡くなり、今回会うこ

とはできなかつたが、僕にたくさんの大切なことを教えてくれ、たくさんの大切な思い出があるロイスさんに胸を張れる生き方をしたいと思つた。

独楽を折つた後、ノーマさんが作つてくれた夕食を食べた。みんな僕に

「若いんだからもつと食べなさい。」

と言つて、僕にサーモンをたくさん食べさせてくれた。すごくおいしくて、すごく楽しくて、腹だけでなく心も満たされた。すると今度は眠気が僕を襲つてきた。アメリカに来て二日がたち、緊張がほぐれてきたことでたまたまついた疲れがどつと出てきたのだろう。三人が帰つた後、すぐにベッドに入つた。一瞬にして眠りに落ちた。

—三月十九日（日曜日）—

時計の針は九時を指していた。まずい、寝過ぎた。僕は大慌てで着替えて一階へ降りた。アナーバーで過ごす最後の日。車で一時間程離れたところにあるノバイからマークさんとジョアンヌさんが迎えに来てくれる午後一時頃までノーマさんとクラフト作りをすることにした。

ノーマさんがベイスメントから模様がすごくきれいな色紙を持ってきた。日本の和紙らしい。そして空っぽの卵の殻（割れていない）。小さな穴を開けて中身を出したそうだ。（も持ってきた。何を作るのか尋ねると、「和紙で卵の殻の飾り付けをするんだよ。」

とノーマさんが教えてくれた。卵の大きさに応じた量の和紙を切り出し、それを五ミリ幅に切る。そしてそれをのりで卵にはる。単純だが細かいこの作業を、僕はノーマさんと話しながらした。ロジヤーさんも通りがかりに「おつ。がんばっているなー。」

と言つてくれた。ノーマさんは、デザインが好きで和紙を集めていること、母も数年前に同じクラフトをしたこ

となどを教えてくれた。僕は小さい頃毎日のように近所に住んでいたスザンさんの家や自分の家でクレイや折り紙の作品を作つていたことを話した。クラフトは好きだし、クラフトを通して英語を学んだ、といつても過言ではない。気付いたらさつきまで白色だった卵の殻は、美しい和柄に変わっていた。まさに「ジャパニーズ・イー

スター エッグ」だ。正式名称の「和紙エッグ」よりもこっちの方がかっこいい気がする。ノーマさんはこれまでにたくさん卵の飾り付けをしてきたらしく、和紙エッグでイースターアーティストを作つたそうだ。クリスマスツリーのイースター版のようなもので、和紙エッグの「和」とツリーの「洋」が融合して独特の美しさを放つていた。

その後二時間程卵を乾かして、出来上がつた卵を箱につめてスリッケースに入れると、玄関のチャイムが鳴つた。マークさんとジョアンヌさんが迎えに来てくれたのだ。四日間に渡つてすごく楽しい時間を過ごさせてくれたロジヤーさんとノーマさんにありがとうございましたと言つた。

「次来るときはもう大学生だね。」

とロジヤーさんとノーマさんは言つた。

マークさんの電気自動車に乗つてまず向かつた先はレストラン。僕たち三人はピザを注文した。マークさんとジョアンヌさんは、出てきたピザを食べて、「あまりおいしくないな。」

▷子どもノフィクション文学賞 ◇

と言つていた。グルテンフリーのピザだつたのだが、僕には違ひが分からなかつた。

少し遅めの昼食の後、マークさんとジョアンヌさんの家へ向かつた。僕が泊まる部屋を教えてもらい、そこにスリッケースを置いて、マークさんと近所の散歩へ出かけた。最近オープンした図書館を見て、通りを渡つたところにある牧場へ寄つた。百年以上前からあり、現在は家畜を育ててはいないが、昔の牧場を再現し、百年前の農家の生活が実際に体験できる場になつてゐるそうだ。牧場の中にあるスナックショップのおばさんと立ち話をして、牧場の中をぐるつと一周して、家に帰つた。スナックショップのおばさんは、若い頃世界各地を旅していらっしゃく、その中でも特に日本が好きだつたと教えてくれた。サービスがすばらしくて、唯一もう一度行きたいと思つて実際に行つた国だ、と言つてはいた。改めて日本の「おもてなし」の精神を大切にしていきたいと思つた。

昼にたくさん食べたので夕食は軽く済ませた。夕食後は三人でボードゲームとカードゲームに没頭した。初め

て見るゲームも多く、最初の方は負けてばかりだつたが、何回かするうちに慣れてきて、勝てるようになつてきた。キングズインザコーナーというお金の代わりにチップ（プラスチックのコイン）を賭けるカードゲームが特におもしろかつた。最後の方でやつと勝てたときはすごくうれしかつた。ボードゲームとカードゲームを一通りやつて、次はスクアブルという英単語を並べるゲームをしよう、ということになつたのだが、僕がウトウトしだしたので、そこで切り上げて寝ることにした。まだ八時だったので、体が時差に慣れるまでもう少しかかるのだなと思った。

一三月二十日（月曜日）

家の前の道を走る車の音で目が覚めた。五時半頃だつたが、外はまだ暗かつた。シャワーを浴びて、朝食のシリアルを食べて（久しぶりでつい食べ過ぎてしまつた。）、八時から行く予定のセント・マシュー幼稚園ですることの準備をした。準備といつても五十匹のピカチュウに五十個の独楽、それに紙飛行機を幾つかバックに入れただ

けだが。

八時少し前にセント・マシューに着き、先生たちにあいさつをして幼稚園教室へ向かつた。セント・マシュー・スクールに行くのは初めてだつたのすごく緊張していたが、教室に入るなり子どもたちがわつと寄つてきてくれて、緊張は一気に吹き飛んだ。九時まではフリータイムだったので、子どもたちとブロックで遊んだり、絵を描いたり、人形で遊んだりして過ごした。ブロックで遊んでいた男の子たちには、

「こうするとかっこよくなるよ。」

とアドバイスをすると喜んでくれて、すぐに打ち解けることができた。九時になると全員がカーペットに集まり、そこで先生が絵本を読んでくれた。絵本の読み聞かせの後は自己紹介タイム。全員が名前と、好きな食べ物や遊びを教えてくれた。

自己紹介の後、七、八人の小グループに分かれてアクティビティをした。僕は自分のグループの子たちと折り紙をすることにした。チューリップなどの簡単なものを

作つたのだが、子どもたちは途中で飽きてしまつた。試しに紙飛行機を折つてみると、皆不思議そうに寄つてきた。コピー用紙を折つて作る簡単な紙飛行機しか見たことないこの子たちにとつて、カラフルで複雑なつくりをした日本の紙飛行機は不思議なものに違ひなかつた。子どもたちが自分も折りたい、と言つてきたのだが、五歳児には厳しいだろうと判断し、近くにいた子たちに

「これを飛ばしてみて。」

と声をかけた。飛ばし始めると子どもたちはみんなはまつていって、僕のグループの人数は八人から十人、十五人へと少しづつ増えていき、しまいにはクラス全員が僕の近くに集まり、紙飛行機を飛ばしていた。一人一人にその場で紙飛行機を折り、飛ばし方を教える。そうして一人一人と交流する中で全員の名前を覚え、仲を深めることができた。

グループアクティビティを終えて、ついにランチタイムになつた。幼稚園生の多くは弁当を持っており、スクールランチを食べたのは僕とヴァンスという子の二

▷子どもノフィクション文学賞 ◇

人だけだった。その日のメニューはポスコスティックだった。ところが熱いチーズを細長いパンの中に流し込んだもの。それがポスコスティックだ。シェフのおじさんには「ずっと食べたいと思いながらも名前が分からなくて手に入らなかつたんだ。セント・マシューに来た日にポスコスティックが食べられるなんて。僕は幸せ者だよ。」と言うと、おじさんはおまけしてくれた。感謝している。昼食中、園児たちは僕に「グローサリー・ギヤング」という最近人気の子ども向けのアニメや、自分の弁当の中にあるお菓子などについて教えてくれた。中には僕が小さい頃によく食べていただけの菓子もあつて、そのことを話すと園児たちは皆喜んでいた。昼食後はみんなでおもちゃで遊んで過ごした。

あつという間にジョアンヌさんが迎えに来てくれる時間になつた。

「金曜日にまた来るからね。」

と言つて僕は教室を後にした。車の中でジョアンヌさん

に幼稚園があつたことを話しながら家に帰つた。

—三月二十一日（火曜日）—

特に予定はなかつたので、夕食の時間まで幼稚園生にプレゼントする紙飛行機を折つたり、近所を散歩したりして過ごした。夕食は、ジョアンヌさんが教えているイングリッシュクラスの方々ビレストランで食べることになつっていた。来週日本に帰国する方のさよならパーティーをするそうだ。僕の両親もこのクラスを通じて二年前にマークさんとジョアンヌさんと出会つたそうだ。また、僕が生まれたとき、父は彼らの家にいたらしく、ジョアンヌさんはいつも「私はショウゴのアメリカのおばあちゃんだからね。」と言つてくれる。ジョアンヌさんは僕の二歳頃の話をたくさんしてくれた。初めて知つたこともあつて驚いた。夕食はアメリカンサイズだった。とにかく大きい。日本人のおばさんたちは皆「大きいねえ。うわ、大きいわ。」

と言ひながら写真を撮つていた。僕も初めは大きいなあ、と思っていたが、食べ出すとおいしくて、案外べろりと

平らげてしまった。

—三月二十二日（水曜日）—

ほとんど一日中車の中かモールの中にいた。買い物をしたのだ。土曜日に日本のクリームシチューを作る予定だったので、材料を買つたり、アメリカだからこそ買えるビッグサイズのピーナッツバターやチエリオス（シリアル）を買つたりした。また、妹の八歳の誕生日プレゼントとしてドレスを、そして自分のためにボロシャツを買つた。慌ただしい一日だったが、ジョアンヌさんと車の中でたくさん話せたし、大好物であるピーナッツバターを手に入れることができたのでよかつた。

—三月二十三日（木曜日）—

マークさんとヘンリー・フォード博物館へ行つた。アメリカの自動車開発に飛行機の開発、そしてアメリカの歴史について学べる博物館だ。マークさんはところどころで

と自分が若かつた頃のことを教えてくれた。博物館の中ではたくさんの写真を撮つた。途中でデジカメの電源が切れてしまつたので、i-Padのカメラに切り換えた。僕のi-Padには、マークさんが飛行機のパイロットになりきつている写真や、フォード・モデルTに乗つている僕ら二人を撮つてもらつた写真などが大切に収められている。ジョアンヌさんはマークさんのパイロット姿に爆笑していた。帰り際に出口の前にあつたホットドッグの形をした車を見て思い出した。「小学生の頃に家族で来たな」と。

—三月二十四日（金曜日）—

朝からワクワクしていた。もうすぐセント・マシューの子たちに会える、と思うと楽しみで仕方なかつた。幼稚園教室に入るなり、子どもたちがわつとかけ寄つてきた。

「やつた！ ショウゴが来てくれた！」

「私が子どもだった頃はこの車がよく走つていたなあ。」

第9回
△子どもノフィクション文学賞○

この日のアクティビティは、紙にかいてあるイースターエッグに色を塗つて、それを切つてパズルを作るなどだった。僕は子どもたちに何色で塗るのか尋ねたり、イースター エッグを切り出すのを手伝つたりした。子どもたちは、出来上がつた作品を誇らしげに僕に見せてくれた。一人一人の思いが詰まつた作品はどれも輝いて見えた。

アクティビティの後はみんなで外に出て遊んだ。最初はみんなでボール遊びをしていたのだが、一人の子が僕を追いかけ始めたことがきっかけとなつて、僕を追いかける子どもの数がだんだん増えていき、最終的には僕一人対幼稚園クラスの子全員のおにごっこが始まった。もちろんおには子どもたちで、僕は追いかけられる側。初めはがむしゃらに追いかけてきただけだったが、子どもたちも時間がたつにつれ、頭を使って攻撃してくるようになつた。全員で手をつないで円を作り、僕を囲んでつかまえにきた。子どもたちの発想に脱帽した。

昼食後の休けい時間に、子どもたちが僕のために絵を

描いてくれた。食べることはできなかつたが、おもちゃの昼ご飯も作つてくれた。子どもたちのやさしさに心が温まつた。

帰る前に、子どもたちに折り紙の独楽と、紙飛行機をプレゼントした。子どもたちは、「来週の海賊パーティーに来てね!」と言つてきた。このクラスではお楽しみ会のことを「海賊パーティー」と呼ぶらしい。来週はすでに帰国しているから来れないのだが、と思うと悲しかつたが、最後は最高の笑顔でさよならを言おう、と僕は決めた。

「次会うときはたくさん遊ぼうね。」

と僕が言うと、子どもたちが僕のところにわつと寄つてきて、僕に飛びついてきた。みんなが僕の腕や肩につかまつている様子は、大きな木みたいに見えただろうな、と思う。帰りの車の中でこのことを話すと、ジョアンヌさんは「そういうときはしゃがむといい。子どもを落とす心配がないからね。」

とアドバイスをくれた。

セント・マシューで過ごした二日間は最高に楽しかった。「セント・マシュー幼稚園にボランティアとして行かせていただきたい。」という僕からの申し出を受け入れてください、すばらしい経験をさせてくれた先生方にすごく感謝している。すばらしい先生方と、子どもたちとの出会いは、僕の一生の宝物だ。

—三月二十五日（土曜日）—

朝からマークさんとセント・マシュー教会（セント・マシユースクールはこの教会の学校）に出かけた。著名な古代史の先生であるマイヤー教授による、「この世界を変えた一週間」という講演を聞きに行くためだ。イエス・キリストが生きた時代を、最新のデータを基に、地学、人類学、歴史学の三観点から分析する、というのがテーマだった。周りは皆大人だったが、同じテーブルの人の考え方を聞いたり、自分の意見を伝えたり、と有意義な時間を過ごせた。休憩時間に当時のローマ帝国について書かれた本を買った。日本ではなかなか手に入らない

とても大きなドーナツも食べた。

帰宅後は早速クリームシチュー作りを始めた。アメリカに行く前に何度も作っていたので、スムーズに作れた。

夕食のときの、

「すごくおいしい。さすが料理上手のアイコ（母の名前）の息子だ。」

というマークさんのコメントと、マークさんがシチューを気に入つておかわりをしてくれたことがうれしかった。ジョアンヌさんはレシピを教えてほしいと言つていた。僕のクリームシチューを気に入つてもらえてよかったです。

—三月二十六日（日曜日）—

あつという間にノバイで過ごす最後の日になってしまった。午前中に荷物をまとめて、昼頃にマークさんの車に乗つて出かけた。

昼食はレストランで食べた。僕はステーキを注文したのだが、どれくらい焼くのか、サイドディッシュの卵はスクランブルにするのかゆで卵にするのか、トーストの

第9回
△子どもノンフィクション文学賞〇

焼き具合はどうしたいか、と細かく質問された。これがアメリカのレストランなのだ。細かいところまで注文し、その通りのものが出でてくる。ステーキはとてもおいしかった。外は珍しいことに大雨だつた。

昼食後は店に行つて、先週したゲームの一つである「スキップボーン」を買つた。どこの店でも売り切れていて、五、六店をまわつた末に手に入れることができた。

家に着くなり、三人でカードゲームを出して遊んだ。

小学生の頃は毎週僕たちは二人と夕食を共にし、その後カードゲームやボードゲームで遊んでいた。二人は僕が小さかつた頃の話を聞かせてくれた。僕が生まれる前から僕のことを知つていて、二年に一度は会つてゐる二人は、僕にとつても、僕の家族にとつても、言葉で言い表せないほど大切な人だ。ホームステイをさせていただき、本当に楽しい時間を共にしてくれた二人には感謝の気持ちでいっぱいだ。

夕食後は何ラウンドかゲームをして、明日の朝は早いから、と早めにベッドに入った。

—三月二十七日（月曜日）—

四時に起きて、さつと身支度をして、スーツケースを車に運んだ。行きは折り紙の作品と服が少々しか入つていなかつたので軽かつたが、帰りはアナーバーでもらつた本などが入つていてとにかく重い。だが、僕はこの二週間で、腕の中にあるスースケースよりもつと重く、もつと大きなものを得ることができた。

ジョアンヌさんの車に乗つて、四時半には家を出た。月が見え、二週間前に考えていたことを思い出した。月は見事に逆向きになつていた。（正確に言うと、ほぼ満月→ほぼ新月）外の温度はマイナス二度だつた。もうすぐ四月なのにミシガンはまだ冬なのだ。

デトロイト空港に着き、カウンターに荷物を預けに行つた。さあ、搭乗手続きだ、というところでトラブルが発生した。アメリカでは十六歳未満の子どもだけによる飛行機の乗り換えが認められていない。僕は十四歳。シカゴから日本行きの飛行機に乗ることになつていたので、このままでは帰国できない。事情を説明しても、空

港の職員は

「規定で認められていないので。」

と繰り返すばかり。こんなやり取りが三十分以上続いた。

最終的には、ジョアンヌさんが

「直行使のあるシカゴまで車で行こう。」

と言つてくださいり、車でシカゴに向かうことになつた。時間は刻一刻と過ぎて行き、離陸予定時刻が迫つてくる。間に合わない、と思つたその時、僕はあることに気付いた。先程まで同じだつたナビが指している時刻と僕の腕時計が指している時刻が一時間もずれていたのだ。そこで初めて気付いた。近いと思つていたデトロイトとシカゴでは一時間の時差がある、ということを。

飛行機には間に合わなかつたので、シカゴで一泊することになつた。宿泊先は二週間前に空港内を走る電車の窓から見えた大きなホテル。部屋に荷物を置き、ジョアンヌさんとホテル内とシカゴ空港内を散歩した。夜ジムに行つたときにホテルと空港が地下通路でつながつていることに気付いた。残念ながらジムには入れてもらえない

かつた。十八歳以下だからだつた。

夕食としてサラダを食べて、テレビで映画を二本程見て、寝た。車の中でも寝ていたので、すぐには眠れなかつた。

—三月二十八日（火曜日）—

六時頃に起きて、朝食を食べにジョアンヌさんと一緒にレストランへ降りた。僕はパンケーキを食べることにしたのだが、量が多くて、くどかつた。ホテルの部屋で、「もう半年間はパンケーキを食べない。」

と僕はジョアンヌさんに言つた。ジョアンヌさんは笑つていたが、僕は本気だつた。実際に、九月になるまではパンケーキを食べなかつた。このことを伝えたらジョアンヌさんはどんな反応をするのだろう。

十時前にホテルの部屋を出て、空港へ向かつた。昨日たくさん話したので、空港のカウンターの方とは顔見知りになつっていた。カウンターで荷物を預け、ジョアンヌさんと話しながら搭乗ゲートへ向かつた。散歩したり、話したりしているうちに搭乗開始の時間になつた。マー

▷子どもノフィクション文学賞 ◇

クさんとジョアンヌさんのご協力なくして僕の帰国はなかつただろう。二人には本当に、本当に感謝している。
最後に
「十六歳になつたらまた来てね。」
とジョアンヌさんが言つてくれた。次アメリカで会うのが待ち切れない。

飛行機の中では何本か映画を見て、おいしい食事を食べて、ぐつすり眠つて、とすごく快適な時間を過ごした。ちなみに、僕が乗つていた飛行機は機体にスター・ウォーズのキャラクターが描かれている「スター・ウォーズエアブレイン」だつた。このことは日本に着いてから気付いた。時差の影響で、帰国後はとにかく眠かつた。羽田空港の鳥取行きの搭乗ゲートの前で眠つてしまい、危うく飛行機に乗り遅れるところだつた。飛行機の中でも爆睡し、目が覚めたときには鳥取に着いていた。空港の到着ロビーで二週間ぶりに家族と再会した。日本語で話すのが照れくさくて、家に着くまでは英語で話していた。

「おわりに」
皆僕との再会を心待ちにしていてくれた。
「よく来てくれたね。ありがとう。」
とも言つてもらえた。何かすごいことをしたわけではない。一緒に話し、一緒に遊んだ。ただそれだけなのに、みんな喜んでくれた。なぜだろう、と考えてみたが、よく分からなかつた。けれど二つだけ確かなことがある。
一つ目は、両親のおかげだ、ということ。僕は小さい頃から「出会いを大切に」と両親に教えられてきた。僕の両親はアメリカで出会つた方々との友情をとても大切にしている。今でもこまめに連絡をとつたり、アメリカに住んでいた頃は毎日彼らと会つて話を時間を僕らに与えてくれたり。両親が彼らとのつながりを大切にしていたおかげで今回の旅は実現した。両親の友人の紹介で新たに出会つた方もいる。彼らとのつながりも、この先出会う多くの方々とのつながりも大切にしたい。

二つ目は、僕が彼らと一緒にいた時間を心から楽しんでいた、ということ。セント・マシュー幼稚園でも、ボ

ランティアとして手伝いに行つたのに自分が一番楽しんでいたな、と終わつてから思つた。でもそれでいいんだと思う。僕の中に「何かをしてあげる」なんて気持ちは全くなかつた。共に楽しみ、共に笑う。ただそれだけを考えていた。自分が一番楽しんでいたから、一番笑つていたから、幼稚園の子にも、ミシガンで出会つた多くの方にも喜んでもらえたのだと思う。

僕は自分の進路について考えるためにミシガンへ行つた。でも今回の旅では、多くの方との出会いを通して、それに加えて自分を見つめ直すことができた。

僕は家族や友人との時間を心から楽しみ、共に心から笑える人でありたいと思う。これまでそうであつたように、これからもずっと。